

ホブスン帝国主義論における社会進化論的思考

尾崎 邦博

I 問題の設定

—ホブスン帝国主義論と社会進化論—

ホブスン (John Atkinson Hobson, 1858-1940) は帝国主義論の先駆的な研究者として、またニュー・リベラリズムを代表する思想家として知られている。彼が本格的に執筆活動を開始したのは1880年代後半のことであったが、周知の通り、この時期は生物学説の発展が学問や思想の諸領域にたいして重大な影響力を既におよぼしつつあったのであって、社会科学や社会思想の諸分野へのそうした影響力の波及の結果、社会進化論と呼称される思想潮流が形成されていた。彼が自身の思想を形成していった時期は、まさにそうした思潮の全盛期にほかならなかったから、彼がそうした潮流から重大な思想的影響を受けていたとしても驚くにはあたらない。たとえばスペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) はホブスンと同じイングランドのダービー出身であり、ホブスンは後に自伝『経済学的異端者の告白』(1938)の中で、十代の頃にスペンサーの姿を実際に度々目撃していたことを記している¹⁾。さらにホブスンは、スペンサー没後の1904年1月に思想家としてのスペンサーの功績と影響を回顧する短い論説を発表していた。この論説は、好むと好まざるとにかかわらず「我々は皆、今日ではスペンサー主義者である」(Hobson 1904, 49)と語るホブスンが、スペンサーの思想を明確に論じた唯一の

ものである。こうした点を根拠として、たとえばウィントロップ (Norman Wintrop) は、『自由民主主義理論とその批判者』(1983)のなかで、ホブスンはほとんどスペンサーの弟子と言ってもよい、とさえ述べている²⁾。しかしながらホブスンによるこのスペンサー論の内容は、ホブスンへのスペンサーの思想的・理論的な影響を読み取ることを直ちに可能ならしめるようなものではなかった。仮にホブスンの思想において社会進化論的な要素が看取され得るとしても、そうした点がすべてスペンサーからの影響のみに起因すると考え得るわけでもない。

ところで50年以上にわたる執筆活動から産み出されたホブスンの多岐にわたる著書のなかで社会進化論的な性格が色濃く浮き出ているものの一つとしては、最も良く知られている彼の代表作『帝国主義論』(1902c)があげられる。そしてこの『帝国主義論』の中でとりわけそうした社会進化論的な思考が最も明瞭に表出している部分は、第2篇「帝国主義の政治学」の第2章「帝国主義の科学的擁護論」であった。この「帝国主義の科学的擁護論」は、もともとは『帝国主義論』刊行の年である1902年に『ポリティカル・サイエンス・クォーターリー』誌に掲載された論説「帝国主義の科学的基礎」(1902b)を、若干の修正を加えた上で収録したものであった。そしてその部分において帝国主義を科学的に擁護している、と彼によって見做されていたのは、生物学的な思考法を自身の社会理論

に恣意的に応用していると彼が考えた当時の一部の社会学者達であった。そうした論者によって頻繁に用いられていた「生存のための闘争」や「最適者の生存」といった概念は、社会進化論の冷酷非情な側面を象徴する標語としてよく知られている。さらにそうした概念が、帝国主義の時代における列強諸国間の熾烈な角逐とそれの勝者たる強国の支配権を正当化するために用いられがちであったこともまた、殊更に彼に指摘されるまでもなくよく知られている。

ホブスンによれば、動物界において発見された「個体ならびに種の進歩の法則」(Hobson 1902c, 162)を一部の社会学者はあまりにも安易に人間社会に適用してきている。そうした社会学者にしたがえば、他の諸民族(races)ないし諸国民との絶え間ない闘争はある特定の民族ないし国民の維持および進歩のために必要不可欠な条件である。さらに社会進化の原動力である「諸民族および文明の諸類型の間の肉体的な闘争」(Hobson 1902c, 163)を緩和したり抑制したりするならば、民族や文明の活力は衰えてやがて死滅にいたることになる、と力説されていた。このように人間社会の進歩は「民族間闘争(race struggle)」(Hobson 1902c, 165)の維持を常に必要としているのであり、そのような軍事的ならびに産業的な闘争の維持は、闘争参加者の生命力と社会的効率を活気づけ、そうすることで自然選択の過程を設定することになる。そうした過程においては、弱い民族は衰退してゆく一方で、社会的効率において優れている民族は生延びて繁栄し他民族を支配することになる。このように、優れた民族、つまり「最高の社会的効率を有する民族」(Hobson 1902c, 163)によって地上が占有されて統治されることは当然のことと考えられたし、人類一般の善にとっても望ましいとされていた。そしてこうした見方こそが、ホブスンが「帝国主義の科学的擁護論」と呼んでいたものにほかならない。

このように『帝国主義論』のこの部分に深く

浸潤しているように見える社会進化論的な思潮は、前述した通り生物学をはじめとする自然諸科学が社会思想領域に影響を及ぼすことで生まれたものであり、生物社会の法則に立脚する人間社会についての科学的理論としての体裁を纏った言説として、当時の社会に流布し普及していくことになった。ここでのそうした思潮にたいするホブスンの視線と態度は、帝国主義の科学的擁護論という括り方によく現れている。特定の政治的な立場を擁護する言説はしばしば科学的な理論を装って社会的に流通し機能する、といった含意が、そうした彼の言葉遣いに込められているように思われる。そしてこのように科学的理論を僭称する言説が現実社会や政治過程において機能する様式を考察するための素材としては、ここで取り上げる帝国主義と社会進化論の思潮との関係ほど好適な事例も少ないであろう。そうした意味でも、彼によるこの問題への思想的対処を取り上げて検討することは大いに意義深いことであるように思われる。

さて、ここで彼の帝国主義論と社会進化論との関わりという見地から、先行研究を整理しておきたい。従来の研究史においてこうした問題が十分に着目されてきているとは到底言えない。たとえばこの時期のイギリスにおける社会進化論と社会理論との間の思想的相互作用を詳細に探った研究である、ジョーンズ(Greta Jones)の『社会ダーウィニズムとイングランド思想』(1980)は、ホブスンを取り巻いていたこの時代の思潮を分析した興味深い研究であるが、この書物においてさえ彼についてはごく僅かな言及がなされているにすぎない。周知の通り『帝国主義論』をめぐる研究史においては、帝国主義政策の発動を招来する政治的経済的な力学が専ら着目されてきたために、『帝国主義論』における社会進化論的な要素が詳しく論じられたことはなかった³⁾。ケイン(Peter Cain)の『ホブスンと帝国主義』(2002)においてさえそうした問題はごく簡単に触れられて

いるにすぎない (Cain 2002, 146). このような帝国主義と社会進化論との関わりをめぐる研究としてはやはり、邦訳もされているセンメル (Bernard Semmel) の『帝国主義と社会改革』(1960) が先駆的な企てであった。それ以降、こうした関わりについての考察は、ホブスンの研究者によるよりもむしろ、後述する社会進化論者キッド (Benjamin Kidd, 1858-1916) についての浩瀚な研究書を著したクルック (Paul Crook) によって進められてきているのであって、彼の著書『ダーウィニズム、戦争および歴史』(1994) や『ダーウィンの上着の裾』(2007) ではホブスンの帝国主義論も簡単に言及されている。

またニュー・リベラリズムについての最初の包括的な研究書を著したフリーデン (Michael Freedon) の『ニュー・リベラリズム—社会改革のイデオロギー』(1978) においては、ホブスンの思想における有機体論的思考等にみられる生物学的な影響が考察されているけれども、彼についてはそうした見地からの人間福祉 (human welfare) に関する議論が取り上げられているだけであり、帝国主義問題との関わりはまったく言及されていない。その後フリーデンの関心は様々な社会思想や政治理論のイデオロギー構造の分析へと向かっていくのであるが、こうした作業は『イデオロギーと政治理論』(1996) に結実することになる。そして彼の最新の論文集である『自由主義の諸言語』(2005) においては、ニュー・リベラリズムや優生学等の思潮もそうした視角から分析し直されている。

本稿ではまず、ホブスンが帝国主義の問題にさほど関心を抱いていなかった 1890 年代半ばから『帝国主義論』にいたる時期の彼の著作を考察の対象とし、帝国主義論の前述した部分へと結晶してゆく彼の社会進化論的な思考を検出することをめざす。そうした作業に取り組むなら、帝国主義の擁護者としての「生物学的」社会学者の言説との比較を介して、彼の思考の特

質がより明らかになってゆくであろうし、彼の思考を含む当時の社会進化論の思潮の社会的機能と布置状態がより明瞭になるかもしれない。先述したフリーデンはこれまで直接的には社会進化論の思潮と帝国主義との関係を論じてきてはいないけれども、そうした関係ならびにそれに対するホブスンの対応を明らかにしておくことは、彼を含むこの時代の思潮のフリーデンのような視角からの言説分析の準備作業としても役立つであろう。

II 機械と産業社会の進化

ホブスは帝国主義の問題に本格的に関心を寄せる以前に既に社会進化の問題に関心を抱き始めていた。彼が独自の社会進化論的な思考を萌芽的に示していた著作として、ここではまず彼の三冊目の著書である『近代資本主義の進化』(1894) の内容に注目してみたい。表題に「進化」の語が使われていることから推察されるように、当時の社会進化論的な思潮から影響を受けているように思われるこの書物は、発展史的にみた資本主義の構造的な変容において「産業の近代的進化」の「主要な物質的要因」(Hobson 1894, 45) として機械が演じてきた大きな役割に注目しつつ、この機械による生産を軸として近代の資本主義の発展を「自然的成長の特徴を示している」「有機的変化の過程」(Hobson 1894, v) として描き出そうとした野心的な著作であった⁴⁾。そしてそうした見地から近代資本主義における産業社会の進化の問題が詳しく論じられているのは、最終章「文明と産業発展」においてである。

ホブスンによれば、機械は産業生産力の飛躍的な発展を可能ならしめてきたという点で近代資本主義を象徴するものであって、そのような機械生産力の特徴は「同じ型の物質的財貨の量を増殖させる」(Hobson, 1894, 369) 巨大な力を孕んでいる点にある。ここで彼は機械によって生産される財貨は性格がどれも一様に似通って

いる、という点に着眼する。消費者が形状や素材等が似通った財貨を大量に消費するかぎりでは、機械はそうした財貨の供給においてきわめて大きな役割を果たし得るものである。しかしそのような財貨の大量消費においては、消費者は自身の個性を喪失してしまうことになりかねない。生産過程における機械の支配が、同じ作業の敏速な反復を労働者に強いることで生産的な仕事における労働者の個性を圧殺しているとすれば、こうした機械の支配は消費にたいしても共通で様な性格を押しつけて、消費者の個性を破壊している、とここでは説明されている。本来このように型に嵌まった生活の欲求充足に適している機械による生産の性格は、本質的に集合的なものであって、巨大な機械生産力が生ぜしめている産業的な諸問題は、この集合的な性格が十分に認識されていないことに起因している、とホブスンはみている⁵⁾。社会の消費力をいとも簡単に凌駕し、結果的に生産と消費との間の不均衡を顕在化させて重大な経済的変動を惹起することになる、この機械の生産力が、産業社会の自由競争において十全に発揮させられる場合には、「浪費と商業的な不安定性」(Hobson 1894, 372)等の問題が招来されることになるのは明らかであったからである。

そのように機械生産力の支配に由来しているとホブスンがみる種々の病弊を免れるための選択肢として彼が提示するのは、消費の質にたいするいっそうの顧慮であった。その理由は、消費において質よりも量が重視される場合には機械の支配力が強まる、ということに求められる。このように考える彼にとっては、社会の進歩とは「量的消費方法の質的消費方法による置換え(substitution)」(Hobson 1894, 373)の問題にほかならなかった⁶⁾。個人が以前に消費していたのと同じ財貨、あるいは個人の必要や嗜好にうまく適応させられていない財貨を大量に需要することに自身の消費力を用いている限りは、個人は機械の支配領域を拡大していることにな

る。それにたいして個人が充足の量よりもむしろ、嗜好や「繊細さ(delicacy)」を発展させてゆくのであれば、個人は意識的な人間的仕事を具現化しており芸術の名に値する仕事により大きな活動範囲を与えることにもなる⁷⁾。

さらにホブスは、消費において量が重視される場合には有限な財貨をめぐる競争が生じるけれども、質的な側面がより重視されるようになり、「各個人が自分の特有の嗜好の充足をより強く主張するようになるにつれて」(Hobson 1894, 377)、二人の人間が同一の財貨の所有をめぐる争う可能性は減少してゆくはずである、と述べている。こうして諸個人が型に嵌まった没個性的な財貨の享受から「純粹に知的ないしは道徳的な享受」へと享受の質を向上させてゆくならば、諸個人間の競争は「協同における寛大な対抗関係(rivalry)」へと道を譲ることになるはずであるとされていた(Hobson 1894, 378)。

そしてそのような「置換え」は、旧来の経済学に陰鬱な性格を刻印してきた収穫逓減の法則さえも克服し得るようにホブスンには思われた。食料をはじめとする物質的な財貨を個人が大量に必要とすればするほどその獲得のために多くの努力が払われるのであるが、通常はその獲得は次第に困難になってゆくのであり、より少ない収穫物の獲得のためにより劣った土地が耕されねばならないことになる。こうして人口が増大するにつれてますます多くの土地が必要になる一方で自然の生産力は減衰してゆくけれども、機械の発展がもたらす経済性の向上はこうした趨勢を緩和し得ない。そしてこうした趨勢もまた「人間的な富および人間生活の量的な評価」(Hobson 1894, 374)に起因していることは明白であって、このように消費の様式が変わらないまま人口が増大してゆく場合には、その社会は結局は収穫逓減の法則の支配を免れ得ないことになる。

質的な消費のいっそうの発展は、そのような

収獲逡減の法則の作用に如何にして対処し得るのか。ある国の土地が小麦栽培と放牧のためのみ使用されているとすれば、消費様式のこうした狭隘さはその国の居住者により劣った土地により多くの労働を投入することを余儀なくさせる。しかしその社会が消費の多様性を発展させて、土地の様々な部分のために小麦栽培や放牧以外の多様な用途を切り開くならば、従来「限界耕作地以下 (below the margin of cultivation)」(Hobson, 1894, 375) とされてきた土地は他の収獲物を生産するために適応させられ得るかもしれない。こうして物質的な消費における多様性が増大させられれば、「物質世界の限界によって人間に押しつけられている」緊張は和らげられるはずであるし、「自然の吝嗇」さえも克服され得るかもしれない。さらにこうした多様性に、物質を改作し得るような技術が付け加えられてゆくのに比例して、物質的な限界さえ克服され得ることになるかもしれないのであり、その結果人間はもはや「エーカー数 (acres)」や収獲逡減の法則の奴隷ではなくなるはずなのである。

このようにホブスは、近代資本主義の巨大な生産力を象徴する機械が生産と消費の双方の過程において惹き起こす害悪を克服する道を模索してゆきながら、「機械と収獲逡減の法則の支配下にある」産業社会の病弊が「量的な生活基準 (standard of living)」の支配に由来していることに気づくのであり、そうした病弊を克服するために産業社会のあるべき進化の方向性として、社会進歩についての量的な基準の質的な基準による置換えを提唱してゆく。

III キッドの社会進化論とその批判

『近代資本主義の進化』の刊行の翌年、ホブスは『アメリカン・ジャーナル・オブ・ソシオロジー』誌に「キッド氏の社会進化」なる論説を寄稿した。このキッド氏とは『帝国主義論』において言及されていた「生物学的社会学者」

の一人であるアイルランド生まれのキッドのことを指していたのであって、ホブスンの論説はキッドの名著『社会進化』(1894)の主張を批判的に検討したものであった⁸⁾。社会進化論に関心を持つ人を除けば、キッドの名を知る人は今日ではけっして多くはないはずである。しかしその主著が刊行されるまではまったく無名の一官吏にすぎなかったキッドは、この著書が刊行されるやいなや一躍当時の社会進化論的思潮の代表的な論客と見做されるにいたった。さらに彼は『社会進化』に続く著書である『熱帯地方の支配』(1898)や『西欧文明の原理』(1902)において、英語を話す国民こそが文明のための信託として熱帯地方の統治を引き受けるべきであると力説して、当時の帝国主義的風潮を独自の社会進化論を以て理論的に根拠づけようと試みてゆくことになる。本節では、キッドという論敵との対峙を通して、ホブスンが社会進化をめぐる如何なる論点を析出させたか、という視座に立ちながら、ホブスンによるキッド批判の中身を検討してみたい。

闘争を社会進歩の必要条件として捉えるキッドによれば、「近代の生理科学 (physiological science)」は、全ての進歩の第一条件として「有能でない者を絶えず除去し、より有能な者が生き延び繁殖することを可能ならしめる、人種内の個人間のその闘争の維持」をあげている (Hobson 1895, 299)。そうした闘争を一時停止させて不適格な成員を生存させようとする企てがなされるならば、進歩は阻害されて不可避免的に「種族の劣化 (deterioration)」(Hobson 1895, 299) がもたらされることになる。下等な動物の間では自然は本能に作用してそうした闘争を維持させているけれども、理性を授けられた被造物たる人間の場合には事情が異なる。人間の理性はそうした進歩の条件としての闘争がもたらす「苦痛と悲惨 (misery) と野蛮性 (brutality)」(Hobson 1895, 299) を容認することはないからである。

キッドのみるところでは、進歩の現代的な条件は、一般民衆のますます大きな割合が「生活の最も激しい対抗関係 (rivalry)」(Hobson 1895, 299) へと組み込まれてゆくことを要求していた。歴史的にみればそうした対抗関係の拡大は、すべての人びとを「機会の平等という足場の上で」(Kidd 1894, 296) 競争関係へと組み込んでゆくという点で平等主義的な志向を有していた。この見地からみれば近代民主主義の発展は機会の平等化に寄与することで競争と対抗の関係をよりいっそう強化し、その意味で進歩を加速させてきていると言える。しかし機会の平等化の結果として一般民衆の知性が教育されるにつれて、彼が社会進歩の敵と見做すものもまた育ってきている。教育の普及とともに民衆の理性は、「自然選択」のための闘争を正当化する理由を見出し得なくなるために、将来の進歩を犠牲にしつつ闘争を停止させ続けるかもしれない。そして彼には社会主義の思潮こそがこうした趨勢を具現化したものにほかならないように思われた。

こうしたキッドの社会進化論の風変わりな点としてつとに指摘されてきているのが、彼がどのように社会進歩を遅滞させる方向で作用する人間理性に対抗するべきものとして「宗教」の必要性を訴えた点である。この宗教の役割は、理性が非難する「人種の進歩にとって必要である行為のための超自然的ならびに超理性的な拘束 (sanction)」(Hobson 1895, 301) を介して、先に述べたような人間社会の進歩の条件を確保することである。ホブスンのみるところでは、キッドの唱えるこの宗教の本質は、諸個人を自分が種族の構成員である代わりに単なる個人である場合に自分の利益に反する行為、「全世代が未だ生まれぬ世代の福祉——種族の利点全体——のために犠牲を払うことになる」行為へと駆り立てる、「種族感覚 (racial feeling)」を指している (Hobson 1895, 302)。

「人種の全ての成員の間の対抗関係の最も強

烈な形態を維持すること」をめざしているこの宗教が「力ある者 (the mighty) をその椅子から放り出し、身分が低く屈従的な者 (the humble and meek) を上昇させる」ことを助ける場合、この宗教は近代の「民主主義的ならびに人道主義的な運動」と調和しているようにみえる (Hobson 1895, 304)。しかしホブスンによれば、宗教のそうした働きの目的は弱者にたいする配慮ではなく、「全ての競争参加者を生活の対抗関係における平等な足場の上に据えることによって不可避的な失敗の苦痛と悲惨が人種の進歩を促進するために最も経済的に用いられる」(Hobson 1895, 304) ようにすることである。言い換えればそれは、「適当な人びと (つまり、真に不適格な人びと) が惨めになり失敗すること」を確実にしめることをめざしているのであって、そうである以上キッドの唱える宗教の真の目的とは「道徳的な水準での競争ではなく、最も効率の低い成員の肉体的存在を押し潰すような競争」(Hobson 1895, 304) を強化することである。このように「対抗関係は、その最も激しい形態において人種の進歩にとって不可欠であり、宗教は、自身の手正義の剣をもって立っている、不運な者の神聖な死刑執行人である」(Hobson 1895, 304)。そしてこうした対抗関係を強化するためには、人口が絶えず「快適な生存の手段」を超過していることが望ましいのであり、それゆえに宗教の実践的な命令は「増やせ」「繁殖せよ」ということになる。そして人口の増大に制限を課するようと思われる思潮は、キッドにとっては「人種の漸進的退化 (progressive degeneration)」(Hobson 1895, 308) を惹き起こすものにほかならなかった。

こうしたキッドの立場をホブスンは、「社会的効率と人種的な成功が人の数を数えることによって測定される」とみる、進歩についての「量的な見解」(Hobson, 1895, 305) を代表していると捉えている。こうして彼がキッドの社会進化論を批判しながら析出させてきた論点は、「社

会進歩についての二つの二者択一的な見解」(Hobson 1895, 309)のそれであった。そしてそうした二つの見解のうち一つは量的な見解であり、いま一つは質的な見解であることは言うまでもない。

ホブスンによれば、進歩についての量的な見解を選ぶ人びとは次のように考えている。人間が自由に繁殖するままにしておけば、生存のための闘争の結果、肉体的にみて平均以下の者が減んでしまう一方で肉体的な強者は生き延びて増殖することになり、この強者は自分たちの住処の狭い限界を破って「より弱い部族の土地」に群がってそれを浸食し、「これら土着住民が自分たちの上昇の途上に立っている時には」(Hobson 1895, 309)この土着住民を容赦なく根絶することになる。そしてこうして実現する量的な進歩は「領土の平方哩数 (square miles)、綿製品の梱包そして多数の下層のイングランド人——軍事的ないし商業的な対抗関係の死に物狂いの競争に従事している——の生命において」(Hobson 1895, 309)測定されることになっていた。

このように帝国主義政策の一般的な基調と親和性を有していることが明らかであるキッドの立場にたいして、ホブスは進歩についての質的な見解の立場を堅持しようとする。彼によれば、これまでの競争は身体的な「適性 (fitness)」だけが重視されてきていたけれども、そうした関係はより高度な適性に価値を見出す競争のより高度な形態によって置換えられるべきであり、物質的生産物や人口といった量的な見地からではなくて「最高の人格 (human character) の見地から」(Hobson 1895, 309)進歩は評価され測定されねばならない。そうした進歩においては高度で多様な精神的・道徳的な能力が成長し開花するはずであり、エネルギーは「戦争や産業のより卑しい闘争」において浪費されるのではなくて「努力のより高度な形態」(Hobson 1895, 309)に充てられることになる。

このようにホブスンによるキッドの社会進化論批判においては、『近代資本主義の進化』の最終章で提示されていた社会進歩についての量的な基準と質的な基準という問題設定が、キッドの社会進化論を触媒とすることによっていっそう明確にされることになった。こうした批判がなされた時期にはホブスはまだ帝国主義の問題に十分な理論的関心を抱いてはいなかったけれども、そのような社会進歩についての量的な基準と質的な基準との対照的な関係という論点は、やがて『帝国主義論』の前述した部分においても生かされてゆくことになる。

IV 帝国主義の科学的擁護論とその克服

前節で浮かび上がったような、社会進歩についての量的な基準と質的な基準という関係を視座として設定するならば、帝国主義の問題はどのように捉え直されることになるのか。前節でみたキッド批判の論文以降、1890年代後半になって帝国主義の問題に徐々に関心を抱くようになってゆくホブスンの眼にそうした帝国主義の核心的な論点として映じたものは、国民としての本来あるべき規模を越えた領土的な膨張は如何なる道徳的な根拠にもとづいて是認されるのか、という問題であった。そのように膨張を志向する立場が、ある国民の真の偉大さは領土の「平方哩」や人口の多さといった数量的な尺度によって測定され得るとみる立場と見事に重なり合うことは、彼にとってはもはや明白であった。

1890年代末から『帝国主義論』にいたる時期の幾つかの論考においては、このような量的な基準に基づく領土的膨張に代わるべき、質的な内的発展の道筋が模索されている⁹⁾。そうした問題は国民のエネルギーの経済的にみて有用な利用法の問題でもあって、このようなエネルギーの経済性を見地からみれば量的な基準対質的な基準といった「帝国の究極的な争点」は、現実の「実業生活」においては「粗放的な耕作」

対「集約的な耕作」という関係として顕現しているともみることができる。この争点は『帝国主義論』第1部で内容的に最も重要な章であると思われる第6章「帝国主義の経済的主根」でも中心的な位置を占めている。そしてそうした「生活の選択」(Hobson 1902c, 97)の問題は農業の分野だけでなく国民の消費生活においてもあてはまるのであって、不労所得を財産所有者階級から労働者階級へと移す「社会改革」は、「消費の健全な標準を向上させること」(Hobson 1902c, 93)によって国内市場の内包的な発展を実現し得るなら、対外的な膨張の必要性を解消するはずである。さらに第2部第2章「帝国主義の科学的擁護論」でもホブソンは次のように述べながら、そうした視角をやはり一貫して堅持していた。「自身の食糧生産および他の物質的な富の諸形態を増大させるために、あるいはその増大した生産物のための市場を見出すために、文明化された国民がその領土の範囲を拡張する自然な必要性はない。進歩は、国民にとっても個人にとっても、いたるところで粗放的ないし量的な経済を集約的ないし質的なそれによって置換えることに存する」(Hobson 1902c, 191)。

このようにホブソンが量的な基準の立場に立っているとみた、膨張を志向する帝国主義政策は、彼によれば収穫逓減の法則を根拠として正当化されることがある。そうした根拠にもとづく帝国主義の擁護論は、面積が限られた土地の上で人口が食料供給力よりも速く増大する傾向を示している場合には、増大しつつある人口の食料確保のために新たに肥沃な土地を求める圧力が強まり、結果として帝国主義的な政策が要請されることになる、というものである。しかし彼によれば、人間は文明の進歩と共に物理的ならびに社会的な環境と人間自身との関係の調整のために理性を適用する力を発達させてきているのもあって、そのように「動物界を支配している必要性」から自身を解放する力が発

達するにつれて、人間は「農業ならびに抽出技術(extractive arts)における収穫逓減の法則の漸進的な緩和」と「人口増加率の制限」によって膨張の必要性を回避することができるとされている(Hobson 1902c, 186)。このように人間が農業技術を進歩させることによって「集約的な耕作」の発展が実現する場合、収穫逓減の法則において表現されている「自然の非合理的な諸力の働き」(Hobson 1902c, 187)が克服され得るかもしれない。

こうした置換えを訴える立場にたいしてキッドを含む論者の「生物学的な議論」はやはり、諸国民が食料をめぐる闘争するように迫られず、「物質的な供給物」にたいする支配力を増大させる一方で人口の増大が抑制される場合、そうした国民は「肉体的闘争(physical struggle)」において脆弱になってゆく(Hobson 1902c, 193)、と力説していた。そうした闘争の緩和と抑制は諸国民の活力を減衰させてしまうとみる立場に論駁を試みるにあたって、ホブソンがキッドと並んで生物学的な立場を代表する論者として検討の俎上に載せたのは、ピアソン(Karl Pearson, 1857-1936)であった。もともとは数学と統計学を専攻しながら、この章でホブソンが取り上げている『科学の見地からみた国民生活』(1901)をはじめとする著作によって優生学思想の代表的な唱道者としても認知されてゆくことになるピアソンの見解にしたがえば、「人種と人種との闘争ならびに、肉体的にも精神的にもより適した人種の生存」だけが「文明の高度な状態」を創出し得るはずであった(Hobson 1902c, 171)。

しかし意外なことにピアソンはキッドとは異なって、部族や国民のような集団の内部における諸個人間の生存のための闘争は、その部族や国民が別のそのような集団と上首尾に競い合うためにはいったん停止させられるべきである、と考えている。なぜなら「その国民の競争的な精力、社会的な効率性、生命のための、あるい

は生活の手段のための個々の競争の摩擦の節約を必要としている」(Hobson 1902b, 172)からである。そしてその場合にそうした国民内部での「内的な闘争」の「一時停止」(Pearson 1901, 56)が認められるのは、階級闘争を含むそうした闘争の抑制によって国民の効率性を高めなければ、「生産の原材料のための、また自身の食料供給のための、平和による、あるいは戦争による、対外的な争いや、他の諸国民との競争に立ち向かうことができない」(Pearson 1901, 60)からである。このように彼は、人類的な規模での闘争と競争に勝ち抜くために「国民的精神」が「国民を一つの全体として組織化すること」が重要であると力説しつつ、ナショナリズム的な立場を強調してゆく。前述したキッドも、すべての国民が「機会の均等」という足場の上で競争的關係に参加することで国民の効率性が高まることを期待していたという意味で、成員間の競争の否定を伴わない国民生活の組織化の重要性を認識していたけれども、ピアソンのナショナリズムはキッドのそれと比べてもいっそう強烈であった。

このように進歩を確保する方法としての「肉体的な生存のための原始的な闘争」が「我々が人類一般と呼んでいる諸国民の社会」にとって有益かつ不可欠である(Hobson 1902b, 469)、と考える「生物学的社会学者」の主張がナショナリズムの立場に固執していた点にホブソンは拘ろうとする。ここで彼は、諸国民間の競争は常に粗野な肉体的闘争のままではなければならないと強調する立場にたいして次のように問いかける。ピアソンが力説するように、諸個人間での生存のための粗野な闘争を抑制し、「社会的な内的平和の領域をそれが国民全体を覆うまで拡大すること」(Hobson 1902c, 174)がピアソンの理想とする社会進歩と調和しているのであれば、文明的な諸国民の間で、「そして最後に人類の完全な社会のために」「国際的な平和と協同」を確立すべく、そうした闘争の抑制によ

る進歩を「ヨーロッパ諸国家の連合体(federation)へ、そして最後に世界連邦(world federation)へと」拡張してはならないのか(Hobson 1902c, 174)、と。

ある国民がその内部の「共倒れの部族間戦争(tribal warfare)を抑制すること」によってその国民自身の力をいっそう発展させ得るとすれば、そうした抑制策は「諸国民間の無秩序状態(anarchy)」には適用されてはならないのか、という問いかけにたいして、そのようには適用され得ないと答える立場は国民という枠を最終的で決定的なものに見做すピアソン等のナショナリズム的な立場であり、そうした立場にホブソンが対置しようとしたのが、インターナショナリズム=国際主義の理念であった。諸国民間の平和的な協同を志向するこうした理念が「政治的な連合的諸制度(federal institutions)」(Hobson 1902c, 180)において具現化されるならば、帝国主義政策が招来するであろう諸国民間の衝突は抑制され得るかもしれない。「自然選択という目的のために諸国民の間で衝突を維持する」(Hobson 1902c, 181)ことの必要性を力説する生物学的な立場は、そのような衝突が抑制される場合には諸国民の個性は衰微し、その活力と効率性が失われてしまう、と主張しているけれども、無論ホブソンはそうした見方をとらない。

諸国民間での粗野な闘争が抑制されれば、諸国民の個性や活力は減衰してしまう、と唱える見解を論駁するにあたってホブソンが持ち出したのは、生物学的な論者が軽視しがちである、先に述べたような人間理性の発達が発達文明の前進において果たし得る役割であった。理性が発達するにつれて必然的に個人間での闘争の様式がより合理的になってゆくことは彼にとって明白であった。野蛮状態から文明社会へと前進するにつれて、土地や食料をめぐる闘争はより善い生活の目的のために物質的・社会的な環境を適応させるための闘争によって取って代わられて

きているのであって、「粗放的な耕作にたいする集約的な耕作の勝利」(Hobson 1902c, 193)が意味しているのはそのような趨勢であった。斯くして戦争等の粗野な闘争に注がれていたエネルギーはそのような闘争様式の変化によって解放され、ますます産業技術(arts of industry)へと方向転換させられてゆくことになるし、産業技術の発展によって自然にたいする征服力が増大するならば、増加する国民の成員を養うための諸国民同士の粗野な闘争の必要性はいつそう減少してゆくはずであった。

ホブスンによれば、従来は「戦争と商業的関税」が諸国民間の闘争の「粗野で浪費的な形態」として現象していた(Hobson 1902c, 196)。そのような粗野な闘争を抑制しつつ「社会的効率の最も優れた形態」を保持し得るような諸国民間のより高次の闘争において必要とされる制度は、彼によれば国際政府である¹⁰⁾。国際政府による世界統治が実現するならば、それは戦争を抑制し自由貿易政策を確立するという役割を演じ得るはずであるし、その結果として「国民的な表現の真に生死にかかわる闘争」が始まるはずであって、「大砲や関税で競い合うことを止めた諸国民は感覚や観念で競い合う」ことになり、競争は質的にみてよりいっそう高度な水準へと引き上げられる(Hobson 1902c, 196)。このように彼にとって理想的な国際政府のあるべき役目は、「国民的な自己表現」のための機会の平等といった、より高次の闘争の公平な条件を保証することで諸国民の闘争と競争の水準を質的に高めてゆくことにあると言える。国際政府がそのように機能を十全に発揮する場合には旧来の粗野な闘争は停止させられるが、それによって諸国民の活力が減衰させられるわけではない。量的な膨張を志向する粗野な闘争が支配的であった状態では、各々の国民のエネルギーは軍事的な分野や粗雑な産業分野に過度に吸収されていたのであるが、野蛮な闘争が抑制されることによってそうした分野からエネルギーが

芸術や科学といった精神的な分野へと方向転換させられるなら、それまで抑えられていた諸国民の高度な自己表現の形態がいつそう個性的に開花させられるはずである。

これまで見てきたように、キッドもピアスンもナショナリズムの立場がインターナショナリズムの立場とは相容れないと機械的に想定していた点では共通していたのであるが、ホブスンは闘争と競争の質を向上させることができるのであれば、諸国民が自由に自己表現を競い合うことによって発揮される健全なナショナリズムは、インターナショナリズムと調和的に両立し得る、と考えたと結論づけることができよう。

V 陥穽としての人口問題

——むすびに代えて——

様々な社会問題を惹き起こす近代産業社会の病弊の背後に機械生産力と収穫逓減の法則の支配を見出したホブスンは、そうした支配からの脱却の道を社会進歩についての量的な価値基準から質的なそれへの移行に求めようとした。やがて彼はそうした量的な基準の立場を、帝国主義を「科学的」に擁護する社会進化論の立場と同一視してゆくことになるのであり、そうした立場にたいして、質的な価値基準に基づく社会進歩の理想を提示しようとする。このように社会進化論的な思考という視座を設定することで明らかになった彼の議論の独自性は、帝国主義の擁護論とそれにたいする批判的な立場の対立を、社会進歩についての量的な基準と質的な基準との対立関係として捉え、量的な基準から質的な基準への発展こそが帝国主義問題の建設的な解決につながると力説した点にある。現実において彼のこうした主張がこれまで見たような科学的擁護論にたいして、政治的言説として勝利し得たかどうかはともかく、1890年代半ばから『帝国主義論』の時期にいたる彼の著作活動は、そのような擁護論の社会的蔓延にたいする理論的闘争の試みであったといえる。最後に

ここで、そのような彼の社会進化論的思考が孕んでいる問題点を簡単に指摘することでむすびに代えることにしたい。

社会進歩についての量的な基準を批判してそれを質的な基準によって置き換えることに力点を置くにあたって、ホブスンの眼前に浮かび上がってきたのは人口の問題であった。社会改革の唱道者は「通り抜けられない壁」(Hobson 1897a, 105)として、人口問題に否応無しに直面させられてきていたからである。この人口の問題にこれまでみてきたような量的な基準対質的な基準といった図式を応用すればどうなるのか。人口増大の人為的な抑制は生存のための肉体的な闘争の条件を緩和することになり、その結果として種族の活力を減退せしめることになる、とみる量的な立場を厳しく批判してきている彼は、そうした立場にたいして人口の量的な制限が必要であるとする立場に立っていたのであり、そうした指摘は既にキッド批判の論説のなかでごく簡潔になされていた。そしてこのように重視されるべきであるのは人口の数よりも人口の「質あるいは性格」(Hobson 1897b, 170)であると力説することによって、彼の思考が孕んでいる問題点もまた浮き彫りにされてゆく。

ホブスンのこれまでの議論によって、「人口の抑制されない増大」は「より低級な生活の必要を強いることによって」「より複雑で質的な生活の成長」を妨げることになることが明らかにされてきている(Hobson 1901a, 213)。一定の面積の土地の上での人口の抑制されない増大は、より高度な生活のために利用可能であるエネルギーの漸進的な減少を意味しているからである。このように、人口の単純な増大は経済的にみればそれだけで社会進歩に敵対しているものである。さらに生物学的な見地からみれば、そうした人口の増大は「最高の道徳的ならびに知的な偉業が可能である社会を維持する」ために要請される、「民族の身体的な改善の条件」の実現を危うくしかねないものでもある(Hob-

son 1897b, 170)、と彼は述べていた。

「人間の生命の量は、質の犠牲によってのみ獲得され得るのであって、その同じ選択に、我々が社会問題の根源を洞察するところではどこであれ、個人および国民として我々は直面している。」(Hobson 1901a, 214) このように述べるホブスンによれば、人口問題をめぐる議論の致命的な誤りはそれを単なる数や量の問題と解することであって、彼にとっては人口問題は数の問題である以上に質もしくは性格の問題でなければならなかった。ここでそのように人口の質を維持するためには、「適格者」と「不適格者」を選り分ける「自然選択」のような粗野で残酷な過程が不可欠であるとは彼は考えずに、そうした方法よりも合理的な方法の採用を模索してゆく。具体的に言えば彼は、合理的な選別の方法として、結婚によって生じてくる子供にたいする親の義務と責任について注意を喚起しようとするのであった。彼によれば、肉体や心が病んでいる子供を世界にもたらず親は、子供と社会にたいして重大な責任を負うことになる。したがって社会的に有害な結果をもたらす可能性のある結婚は、世論による教育や法律によって制限されねばならない、と彼は主張する。

このようにホブスは量的な基準対質的な基準という図式を人口問題に应用することで、人口の質の維持のために産まれてくる生命の質を重視せざるを得ないという立場にいたる。そもそも彼における「質」の概念自体、さほど明確で固定的な意味を有していたのではないから、「質」という概念自体のもつ意味も文脈次第で大きく変動し得るものであった。こうしてもともと彼の社会進化的思考が含んでいた質の重視という観点は、人口問題を契機として限りなく優生学的な見地に近づいていく。優生学の潮流は帝国主義の科学的擁護論と同様に、生物学的に発見された法則に立脚していると称しているけれども、そうした擁護論とは異なり、むしろ社会改良思想と親和性を有する説であることは

従来の研究によって指摘されてきている¹¹⁾。帝国主義の科学的擁護論の疑似理論的性格を批判し、それを乗り越えつつ社会進歩の理想を説いてきたつもりであった彼の思考は、こうして人口問題という陥穽に嵌まり込むことで、そうした文脈にあっては自分が批判してきたような帝国主義の擁護論と同様の機能を演じかねない、という隘路に囚らずも迷い込んでしまったのである。

尾崎邦博

注

- 1) Hobson (1938, 23 / 訳 20).
- 2) Wintrop, ed. (1983, 115 / 訳 134).
- 3) ここで本文では言及しなかったホブスン帝国主義論の研究史について簡単に補足しておく。近年における代表的なものとしてはまず、1968年の『帝国の批判者たち』の著者であるポーター (Bernard Porter) の『上の空の帝国主義者たち』(2004)があげられる。1968年の著書はホブスンをはじめとする自由主義者や急進主義者の帝国主義批判をめぐる思想史的なものであったが、この最新の著書ではむしろ帝国主義を支持した社会の諸集団や諸階層の文化や心性にまで分析を進めて、帝国主義の支持と批判で沸き立つ当時のブリテン社会を活写している。またクリーズ (Gregory Claeys) の『帝国に懐疑的な人びと』(2010)の中身はポーターの1968年の著書によく似ている。その内容は三つの章から成っており、それぞれの章でイギリス実証主義者、社会主義者、そしてホブスンの帝国主義批判が論じられている。このクリーズの著書ではホブスンとピアスン等の関わりが言及されている (Claeys 2010, 244-45)。その他に注目すべきものとしては、ホブスンとニュー・リベラリズムの従来着目されてこなかった思想的側面を照射したガースン (Gal Gerson) の『無秩序の限界』(2004)があげられる。特に帝国主義やジンゴイズムの心理的基礎を解明し得るような個人と社会の心理学にたいする関心をホブスン等が示していたことが詳しく論じられて

いる点が興味深い。また博士論文を刊行したものであるT.サルカ (Timo Särkkä) の『ホブスンの帝国主義』(2009)では、ヴィクトリア時代のジャーナリズム活動を通してホブスンが帝国主義への問題意識を涵養し、南アフリカ問題への対応を通して理論を鍛えていった過程が分析されている。

- 4) 機械をめぐるホブスンの主張については、尾崎 (1998)を参照。
- 5) ここでしばしばスペンサーからの思想的影響が指摘されているA.マーシャルの社会進化論的思考について言及しておきたい。本稿で論じているホブスンの社会進歩観との関係という視角から特に興味深く思われるマーシャルの議論は、『経済学原理』第5版で付け加えられた第6編第13章「生活基準との関係における進歩」に見出されるものである。彼によれば経済進歩は経済主体が欲望 (wants) よりも活動 (activities) を重視するようになることで実現する。人間の欲望はもともと可変的なものであり、最初は生理的な必要の充足を求めていた欲望は多様性を増しつつ社会的な欲望へと発展し得るとされる。このように欲望が変化を遂げてゆくにつれて、欲望と活動との関係も変わり得るのであり、欲望が活動に適合させられていた段階から活動が欲望に適合させられる段階への移行が生じる。活動に適合させられている欲望の水準は「安楽基準」と言い換えられるとすれば、欲望に適合させられている活動の水準は「生活基準」と言い換えられるのであり、「安楽基準」の上昇は粗野な欲望が充足されることであるのに対して、「生活基準」の上昇は「知性や活力や自尊心」を増大させる (Marshall 1920, 574)。こうしたマーシャルの主張を『近代資本主義の進化』の最終章におけるホブスンの欲求 (wants) をめぐる議論と比較することも興味深いように思われる。なおここではマーシャルの場合の wants は先行研究に従って欲望と訳しておいた。こうしたマーシャルの社会進化論的思考を論じている研究としては、馬場 (1961) や岩下 (2008) を参照。
- 6) ホブスンがこのように消費についての量的な

基準と質的な基準という視座を確立するにあたっては、ラスキンから影響を受けた可能性があるように思われる。キッド批判の論文と『帝国主義論』との間に位置する1898年の著書『ジョン・ラスキン、社会改革者』の第9章「機械と産業都市」でホブスは、機械の改良と発展が消費者の嗜好にもたらした悪影響を指摘しつつ、消費における「質的な自己表現と量的な自己表現」、消費の質的な進歩と量的な進歩とを対置している (Hobson 1898, 224)。ラスキンとホブスンとの関係について論じたものとしては、笹原 (1997) や尾崎 (2004) を参照。ラスキンの名前はママリー (Albert Frederick Mumery, 1855-95) との共著である処女作『産業の生理学』では一度だけ言及されているけれども、本格的なラスキンの影響が最初に見受けられるホブスンの著作は『主観的な分配観と客観的な分配観』(1893)である。ここでは「粗野な量的消費」の支配が進歩を妨げるものとして指摘されている (Hobson 1893, 403)

- 7) 画一的な消費から個性的な消費への質的發展の必要性を訴えるこの文脈においてホブスは、社会的病弊の「治療法 (remedy)」はよりいっそう「高度な個性化 (individuation)」に存すると唱える社会学者ゲデス (Patrick Geddes, 1854-1932) の文章を引用している (Hobson 1894, 378 ならびに Geddes 1886, 100 を参照)。個性化あるいは個体化と訳され得るこの individuation という語は、「文明と産業発展」の章では他に一か所で使われている (Hobson 1894, 371)。この individuation はスペンサーの『生物学原理』第2巻において30か所以上で用いられている語でもあって、この概念だけはホブスンがスペンサーから受け継いだ可能性があるかと解釈できるかもしれない。Spencer (1866), vol. 2 を参照。
- 8) キッドの研究としては Crook (1984) を参照。
- 9) ホブスンによるキッド批判の論文から『帝国主義論』の刊行にいたる時期において、帝国膨張の争点を量的な基準対質的な基準という視座から論じた幾つかの論考が発表された。ここでその順序を整理しておく。まず P. ケイン等の研究者によってホブスン自身の執筆によるとされ

る、Nemo なる筆名の著者の「帝国の倫理」と題された論考が『プログレッシブ・レビュー』誌に掲載された (Nemo 1897)。その翌年には『帝国主義論』のプロトタイプと言い得る「自由貿易と対外政策」が『コンテンポラリー・レビュー』誌に掲載されるのであるが (Hobson 1898b)、同じ年には『エシカル・ワールド』誌に「社会学に照らしてみた膨張」なる論考が掲載されたのであり (Hobson 1898c)、この論考は1901年の著書『社会問題』に収録されることになる (Hobson 1901a, 265-71)。また1899年には『エシカル・ワールド』誌に「帝国の争点」なる論考が4回にわたって掲載された (Hobson 1899)。さらに1901年の論考「社会主義的帝国主義」ではポーア人共和国併合をめざす帝国膨張政策が厳しく批判されており、統治能力の限界を越えた膨張を志向する巨大帝国の膨張主義と、内包的な発展をめざすスイスのような小国の健全なナショナリズムとが比較されている (Hobson 1901c, 55-56)。このようにホブスは南アフリカ問題との対峙を迫られる中でナショナリズムの問題への関心を膨らませていった。19世紀に諸民族において開花したナショナリズムが如何にして帝国主義へと変質したのか、という問題意識は『帝国主義論』の基調を形づくっていると見てよい。南アフリカの戦争を論じた彼の論考の中でナショナリズムの変質について言及がなされているものとしては、「南アフリカにおける資本主義と帝国主義」がある (Hobson 1900a)。またこの問題をめぐる具体的な政治過程を分析したものとしては「ミルナーの総督職」が詳しい (Hobson 1900b)。さらに彼の分析視角の独自性がよく表れている点は、帝国国民の中に排外的ナショナリズムや帝国主義の感情が生成してくる過程を人間心理が含む非合理性に着目しつつ、社会心理学風の手法で解明しようとした点である。この側面を代表する著書としては『ジンゴイズムの心理学』(1901b) があげられる (Hobson 1901b)。

- 10) ホブスンの国際政府構想については、Long (1996) や尾崎 (2007) を参照。
- 11) ホブスンを含むこの時代の優生学思想の諸潮

流を分析したものとしてはフリーデンの研究がある (Freeden 2005, 144-72)。

参考文献

- Allett, J. 1981. *New Liberalism: The Political Economy of J. A. Hobson*. Toronto: Toronto Univ. Press.
- Cain, P. 2002. *Hobson and Imperialism: Radicalism, New Liberalism, and Finance 1887-1938*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Claeys, G. 2010. *Imperial Sceptics: British Critics of Empire, 1850-1920*. Cambridge, New York: Cambridge Univ. Press.
- Crook, D. P. 1984. *Benjamin Kidd: Portrait of a Social Darwinist*. Cambridge, Cambridgeshire: Cambridge Univ. Press.
- Crook, P. 1994. *Darwinism, War and History*. Cambridge, Cambridgeshire: Cambridge Univ. Press.
- . 2007. *Darwin's Coat-Tails*. New York: Peter Lang.
- Freeden, M. 1976. Biological and Evolutionary Roots of the New Liberalism in England. *Political Theory* 4 (4): 471-90.
- . 1978. *The New Liberalism: An Ideology of Social Reform*. Oxford: Clarendon Press.
- . 1996. *Ideologies and Political Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- . 2005. *Liberal Languages*. Princeton, New Jersey: Princeton Univ. Press.
- , ed. 1990. *Reappraising J. A. Hobson: Humanism and Welfare*. London: Unwin Hyman.
- Geddes, P. 1886. On the Conditions of Progress of the Capitalist and the Labourer. In *The Claims of Labour*, edited by John Burnett et al. Edinburgh: Co-operative Printing.
- Gerson, G. 2004. *Margins of Disorder*. New York: State Univ. of New York Press.
- Hobson, J. A. 1893. *The Subjective and Objective Views of Distribution*. New York: American Academy of Political and Social Science.
- . 1894. *The Evolution of Modern Capitalism*. London: W. Scott.
- . 1895. Mr. Kidd's "Social Evolution." *American Journal of Sociology* 1:299-312.
- . 1897a. The Population Question Pt. I. *Commonwealth* 2:105-06.
- . 1897b. The Population Question Pt. II. *Commonwealth* 2:170-72.
- . 1898a. *John Ruskin: Social Reformer*. London: Nisbet.
- . 1898b. Free Trade and Foreign Policy. *Contemporary Review* 74:176-80.
- . 1898c. The Social Question: Expansion in the Light of Sociology. *Ethical World* 1:740-41.
- . 1899. Issues of Empire. *Ethical World* 2:404-05, 419-20, 437-38, 450-51.
- . 1900a. Capitalism and Imperialism in South Africa. *Contemporary Review* 77:1-17.
- . 1900b. The Proconsulate of Milner. *Contemporary Review* 78:540-54.
- . 1901a. *The Social Problem: Life and Work*. London: Nisbet.
- . 1901b. *The Psychology of Jingoism*. London: Grant Richards.
- . 1901c. Socialistic Imperialism. *International Journal of Ethics* 12:44-58.
- . 1902a. The Economic Taproot of Imperialism. *Contemporary Review* 81:262-72.
- . 1902b. The Scientific Basis of Imperialism. *Political Science Quarterly* 17:460-89.
- . 1902c. *Imperialism: A Study*. London: Constable.
- . 1904. Herbert Spencer. *South Place Magazine* 9:49-55.
- . 1938. *Confessions of an Economic Heretic*. London: G. Allen. 高橋哲雄訳『異端の経済学者の肖像』新評論, 1983.
- Jones, G. 1980. *Social Darwinism and English Thought*. Brighton, Sussex: Harvester Press.
- Kidd, B. 1894. *Social Evolution*. New York and London: Macmillan.
- . 1898. *The Control of Tropics*. London: Macmillan.
- . 1902. *Principles of Western Civilisation*. London: Macmillan.
- Long, D. 1996. *Towards a New Liberal Internationalism: The International Theory of J. A. Hobson*. Cambridge, New York: Cambridge Univ. Press.
- Marshall, A. 1920. *The Principles of Economics*, 8th ed. London: Macmillan.
- Mummery, A. F. and J. A. Hobson. 1889. *The Physiology of Industry*. London: Murray.
- Nemo. 1897. Ethics of Empire. *Progressive Review* 1:448-62.
- Pearson, K. 1901. *National Life from the Standpoint of Science*. London: A. & C. Black.

- Porter, B. 1968. *Critics of Empire: British Radical Attitudes to Colonialism in Africa*. London: Macmillan.
- . 2004. *The Absent-Minded Imperialists*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Särkkä, T. 2009. *Hobson's Imperialism: A Study in Late-Victorian Political Thought*. Jyväskylä, Finland: Univ. of Jyväskylä.
- Semmel, B. 1960. *Imperialism and Social Reform: English Social-Imperial Thought*. London: Allen & Unwin. 野口建彦他訳『社会帝国主義史』みすず書房, 1982.
- Spencer, H. 1866. *The Principles of Biology*, 2 vols. New York: Appleton.
- Wintrop, N., ed. 1983. *Liberal Democratic Theory and Its Critics*. London: Croom Helm. 氏家伸一他訳『自由民主主義の理論とその批判 上・下』晃洋書房, 1992-1994.
- 岩下伸朗. 2008.『マーシャル経済学研究』ナカニシヤ出版.
- 大水善寛. 2010.『J. A. ホブスンの新自由主義—レント論を中心に』九州大学出版会.
- 尾崎邦博. 1998.「J. A. ホブスンにおける機械と経済学」『社会思想史研究』22:164-75.
- . 2003.「J. A. ホブスンにおける自由貿易とインターナショナルリズム」『経済科学』51 (1): 89-104.
- . 2004.「J. A. ホブスンにおける人間的経済学の構想」『愛知学院大学論叢 商学研究』45 (1・2): 263-74.
- . 2005.「ホブスン帝国主義論における膨張の問題」『愛知学院大学論叢 商学研究』45 (3): 493-504.
- . 2007.「J. A. ホブスンにおける国際政府構想の展開」『経済科学』55 (2): 51-68.
- 笹原昭五. 1997.「ラスキンからホブスンへ—19世紀後期の有効需要論」『経済学論纂(中央大学)』37 (5・6): 99-134.
- 八田幸二. 1999.「J. M. ケインズの政治・経済思想と J. A. ホブソンの帝国主義分析: イギリス新自由主義からケインズへと至る思想的系譜」『経済学論纂(中央大学)』40 (1・2): 69-84.
- 馬場啓之助. 1961.『マーシャル』勁草書房.
- 姫野順一. 2010.『J. A. ホブスン—人間福祉の経済学』昭和堂.

The Influence of Social Evolution Theory in J. A. Hobson's Theory of Imperialism

Kunihiro Ozaki

John Atkinson Hobson, the leading theorist of the New Liberalism, is known as a sharp critic of imperialism. As is well known, the formative period of his social and political thought coincided with the heyday of social evolution theory. The purpose of this paper is to ascertain to what extent his theory of imperialism was under the influence of that theory.

In his search for a remedy for the diseases of modern industrial societies, which were under the dominion of machine production and the law of diminishing returns, he proposed to substitute qualitative for quantitative methods of consumption.

Thus, he adopted a qualitative view of social progress, insisting that by improving the character of consumption, the law of diminishing returns could be defeated, whereas the biological defenders of imperialism, such as Benjamin Kidd and Karl Pearson, maintained a quantita-

tive view of progress, assuming that social efficiency and racial success were to be measured in square miles of territory within the empire.

While claiming that the struggle for existence within a society should be suspended for such a society to be able to compete successfully with another society, Pearson argued that the primitive struggle for physical existence was the best method for securing progress for the society of nations, which could be called humanity.

In refuting Pearson's view of progress, Hobson asked why such a view, which claimed to put down the struggle for life among individuals and enlarge the area of social internal peace until it covered a whole nation, should not claim to extend its mode of progress to the complete society of the human race.

JEL classification numbers: B 14, B 15.